



預言の言葉は、わたしたちにいつそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。

ペテロの第二の手紙 1章 19節

黙 禱	
讃美歌	197
主の祈り	93 - 5A (讃美歌21 P.146)
讃美歌	436
聖 書	ペテロの第二の手紙 1章 12節～21節(新約聖書P.372)
祈 禱	
使徒信条	93 - 4A (讃美歌21 P.148)
讃美歌	460 (1節～4節)
奨 励	「暗やみに輝くともしび」
讃美歌	475
頌 栄	24

\*\*\*\*\*

奨励〔要約〕

ペテロの手紙は各地に離散し寄留しているユダヤ人に向けて書かれています (I ペテロ1:1)。迫害だけでなく、にせ預言者、にせ教師の活動が猛威をふるっていました (2:1)。この問題は「人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来であろう」(II テモテ4:3) とあり、教える側、受け取る側、相互の問題なのです。ペテロは殉教に近いことをふまえ、救いを確信し、尊い約束を確認し、イエス様が再び来られる日をいつも心に留めていることの大切さを教えました (1～11節)。にせ預言者たちの活動は、悪魔の誘惑と同じです。何の備えもなければ、神様から離れさせる危険が潜んでいるのです。イエス様がエルサレムに入城した時、大歓声で迎えた人々は、数日で十字架につけよと心が変わっているのです。現代は、SNSの活用によって、偽情報でさえ急速に拡散します。ペテロはイエス様が病人を癒し、悪霊を追い出し、水の上を歩かれ、嵐を静め、死人のよみがえりなどの御業を見た証人でした。何よりも、変貌山 (マタイ17:1～3) の出来事は、「預言の言葉」を確信するものとなったのです。この世は悪魔の支配下にあり、大切なものが何も見えない暗やみの中にあります。にせ予言者たちは、巧みな作り話を吹聴して、心を迷わせ、信仰を揺さぶり、神様から離れさせようとしていました。そんな中、巧みな作り話に対して「預言の言葉」は「暗やみに輝くともしび」として、道を誤らない大きな力になることを教えました。イエス様ご自身も悪魔の誘惑を経験された時、御言葉によって悪魔の誘惑をはねのけています (マタイ4:1～11)。ともしびの光は弱そうに見えても、目に優しく、自分の足下を照らし、危険なものを示し、進むべき安全な道を見いだすのに役立ちます。また、パウロも悪魔の働きに対して「…御霊の剣、すなわち、神の言葉を取りなさい…」(エペソ6:14～18) と教え、防衛する力があることを教えています。神様の口から出た御言葉 (II テモテ3:16) は、どんな状況でも「あなたのみ言葉は、わが足のともしび、わが道の光です」(詩篇119:105) となるのです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。(I テサロニケ 5:16～17)